

オンライン交流セミナー 実施報告

日 程 令和4年（2022年）7月15日（金曜日） 14時～15時10分

テーマ オンライン等での新たな国際交流の取組

セミナー内容

- (1) Oregon-Toyama Connection
Oregon-Toyama Connection の活動について
- (2) 栃木県那須塩原市
3市町が協力して実施したホストタウン交流事業
- (3) 滋賀県
3つの姉妹友好州省とのオンライン交流事業
- (4) 名寄・リンゼイ姉妹都市友好委員会
コロナ禍における姉妹都市交流活動 ～ 名寄市での取り組み

(1) Oregon-Toyama Connection Oregon-Toyama Connection の活動について

【概要】

富山県とアメリカ・オレゴン州は1991年10月に友好提携をし、2021年に友好提携30周年を迎えたが、昨年は新型コロナウイルス感染症の影響で往来を伴う友好交流が困難になった。そこで困難な時期を逆に活用し、住民同士の結束を強めるため、オンライン等を活用して住民同士が交流する「Oregon-Toyama Connection」を創立。JETプログラム参加者や日米協会、オレゴン周辺在住の富山県出身者等の有志が中心となって活動している。

【活動内容】

- ・2021年7月に Oregon-Toyama Connection 顧問とメンバーが県庁を訪問し、活動のキックオフイベントを開催。
- ・ポスタープロジェクト
新型コロナウイルス感染症の影響で人の往来が難しいなら「モノを活用して富山とオレゴンの魅力をPRしよう！」と考え、始めたプロジェクト。各地域の知名度を高めるため、富山とオレゴンの既存のポスターを活用し、富山駅地下通路等さまざまな場所にポスターを掲示。また、このポスタープロジェクトをPRする総合版のポスターも作成。
- ・マンスリー・ミートアップ
コロナ禍で人の往来が難しいため、オンラインを活用し、毎月富山とオレゴンの人が自由に集えるオンライン懇談会を開催。高校生や大学生も多数参加しており、

これまで 14 回開催し、延べ約 300 人が参加した。富山とオレゴンの交流を広げるためのアイデア交換やフリートークなどを日本語と英語を織り交ぜながら語り合っている。

・富山県とのコラボ事業

富山県が、「起業家の町 ポートランド」からスタートアップの最新事情を学ぶ研修プログラムを実施。その一部に Oregon-Toyama Connection のメンバーも参加し、起業に関心のある富山県内の学生と交流。

また、富山県が実施する富山カップ日本語スピーチコンテストにスピーチの審査時間を利用して、富山県とオレゴン州の交流を深めるためのアイデアを Oregon-Toyama Connection のメンバーを中心に大学生、教師、地域の方々と話し合うグループワークを実施。

(今後について)

- ・Oregon-Toyama Connection には多様な職業やバックグラウンドをもった人が参加しているので、学生や社会人等、年齢を問わずいろいろな方に参加してもらえるように工夫をしたいと考えている。
- ・Oregon-Toyama Connection 創設してから今まで、コロナの影響でオンラインのみでの活動だったが、実際に会って交流したいと考えている。
- ・行政のつながりを民間の人達があまり知らないという状況があると感じたため、民間もコミュニケーションして官民連携でいろいろなプロジェクトを実施していこうと考え、Oregon-Toyama Connection を立ち上げた。

今後は官民だけでなく、産官学連携をして発展していくために、現在メンバーを増やしている。富山県民やオレゴン州民だけでなく、富山県やオレゴン州の人や産品に興味がある人等、多くの方が参加し、異業種の懇親ができ、お互いがグローバルなマインドになってほしいという思いで継続したいと考えている。

※HP : Oregon-Toyama Connection <https://onl.tw/ccH3GHB>

(2) 栃木県那須塩原市

3 市町が協力して実施したホストタウン交流事業

【概要】

東京オリンピック・パラリンピックは、2020 年大会は延期となり、コロナ禍で誘致活動も困難な状況があった。オーストリア共和国のホストタウンとなった栃木県那須塩原市、長野県安曇野市、岩手県矢巾町は、3 自治体が連携することで何かできることがあるのではと考え、3 自治体の特色を活かし、オンラインを活用しながら合同でおもてなし事業を実施。

【3つのおもてなしプロジェクト】

①食のプロジェクト

日本の3自治体の高校生・シェフ・生産者がオーストリアのシェフと連携し、それぞれの自治体の特産物を活用したオリジナルのオーストリア料理を開発し、事前合宿中の選手やパラリンピック委員会の関係者に振る舞うプロジェクト。開発過程ではオンラインを使って会議や試食会を実施。また、制作までの様子を、映像に記録し、ドキュメント動画を作成した。

(成果) レシピ開発に取り組んだ高校生は様々な経験から技術や知識を高めた。また、オーストリアのシェフが参加することにより、両国の食の交流につながった。開発したオーストリア料理は、今後イベントや市内レストランで提供予定。

②音楽のプロジェクト

3自治体とオーストリアの子供たちが音楽を通じて選手を応援するプロジェクト。オーストリア・日本各地で撮影・収録した合唱や演奏を1つの動画にまとめ、同時に演奏したような動画を作成し、編集した動画を、事前キャンプで来日した選手関係者に届けた。音楽学校や3自治体の小中学生、ジュニアアンサンブル、チロルの民族音楽団の方が参加。

(成果) 子どもたちに連帯感が生まれ、音楽の魅力に触れるとともに、音楽の力が人の心に響くことを感じた。また、相手の音楽に触れ楽しく一緒に歌うことができた。

③絵本のプロジェクト

3自治体の小中学生とゴルス村のエルヴィン・モーザー小学校が参加し、「自分たちの街の好きなおところ」をテーマにイラストを使ったオンライン交流会を実施。交流会で使ったイラストを材料に絵本を作成し、絵本は、選手やオーストリア関係者、各学校に届けた。

(成果) お互いの街や学校生活などについて、イラストや動画を通じて興味を深めるとともに、英語で実際に話したり聞いたりすることで、より理解を深められた。また、絵本として形にすることで、記憶にも残る形となった。

【その他の取組】

パラリンピック水泳選手と3自治体の関係者等でオンライン交流を行い、また3自治体とオーストリア関係者は共同で応援を行った。

(気づき・今後について)

- ・コロナ禍で対面での交流ができなくても、取り組める事業はたくさんあると感じた。
- ・学校や選手とのオンライン交流は現在も継続していく。

- ・ レシピを開発した高校生は、今年栃木県で行われる国体で提供する、オーストリアおもてなし料理を開発中。
- ・ 3自治体は、今後も連携し両国の発展と、次期パリ大会に向けた選手の応援を進めていく。

(3) 滋賀県

3つの姉妹友好州省とのオンライン交流事業

【概要】

姉妹友好都市であるアメリカ ミシガン州、ブラジル リオ・グランデ・スール州、中国湖南省との交流では年間を通して多くの訪問団が往来していたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で往来が途絶えてしまった。その際に、国際交流の基本的な考え方において、人と人が実際に出会って意見を交換することや場所やものを実際に見聞きして感じる事が、交流継続や将来につながる交流のために重要なポイントであると認識し、「両者の顔の見える関係を維持」できることと「リアルタイムの情報や魅力発信」が可能であるという点からオンラインを活用した交流を実施することとした。

【両者の顔の見える関係を維持するための事業】

アメリカ ミシガン州と下記の事業を実施した。

- ・ 首長同士の WEB 会議
- ・ アメリカ進出に興味のある滋賀県内の企業向けのオンラインセミナー・相談会
- ・ 県内の教育機関がミシガン州の教育機関の学生と交流するオンライン教育交流
(教育アプリの掲示板を利用し動画やコメントの交換を行った)

ブラジル リオ・グランデ・スール州とは WEB 会議、中国湖南省とはオンラインセミナーや意見交換会を実施した。

【リアルタイムの情報や魅力発信のための事業】

中国湖南省とのオンライン交流会（県外の観光地に職員を派遣し、湖南省の日本語教室とライブでつなぎ、バーチャルで旅行をしてもらう取組）を実施した。

その他、日本や滋賀県を活かしたプログラムとして、オンライン活用して琵琶湖博物館バーチャルツアーやオンライン忍者ツアーを実施した。また、ブラジルの日本祭りで知事メッセージ動画配信とラジオ体操生中継を実施し「健康しが」をアピールしたところ好評だった。

(オンラインのコツ・ポイント・心がけておくこと)

- ・ 次第は事前に共有し、両国の現地時間は必ず併記しておく
- ・ 時差は克服できないが、配慮で乗り越えられる

(例えば、ブラジルの場合どちらかが早朝になるので交代で実施する、日本の月曜日

- はアメリカの日曜日なので避ける、中国は時差が小さいが朝・昼食・夜は気を付ける)
- ・現地に職員など対応者（フォローする者）がいるとなおよい
 - ・会議後の議事録は必須
 - ・通訳がいることに配慮する
 - ・オンラインの場合すぐに開催できるが、直前に設定した会議設定は得られるものは少ないと感じた。

(気づき・課題)

- ・オンラインで実施することで、より多くの相手方に遡及できる可能性がある。
- ・コロナ終息後には、往来を伴う交流を早く実現させたいという思いが強まった。
- ・国際交流の本質が変わるものではないが、往来を伴うもの、オンラインによるもの等、それぞれの強みに応じて使い分け、より幅のある国際交流につなげていくことが必要。

(4) 名寄・リンゼイ姉妹都市友好委員会

コロナ禍における姉妹都市交流活動 ～ 名寄市での取り組み

【概要】

F.G.ハウレット氏(戦後名寄市に28年間居住した宣教師)からの紹介により、1969年、名寄市とリンゼイ市が姉妹都市提携を締結し交流を継続している。

【コロナ前の活動】

1973年から高校生の交換留学生の派遣・受入（2か月のホームステイ）、5年毎に訪問団の派遣と受入、ハロウィンパーティーの共催、姉妹都市友好委員会50周年事業の開催(外国人との英語でのコミュニケーションを通じて、「生きた英語」を学ぶとともに、国際感覚を磨く機会とすることを目的とした「なよろイングリッシュキャンプ」、記念碑政策、記念式典、祝賀会、記念漫画の制作、50周年記念誌の発行等)、カナダ料理教室（名寄産の食材を使い、家庭でできるメープルシロップを使った料理をテーマに開催）、カナダ文化について学ぶ「カナダ塾」を実施。

【コロナ禍での活動】

- ・「カナダ塾」の動画配信

コロナ前に実施していた「カナダ塾」の代案として実施。委員会の役員名寄市に昔いた元ALT（英語指導助手）、それから地元の高校生たちが出演しており、YouTubeチャンネルで配信し、名寄市公式ホームページやFacebookページからもアクセス可能にしている。

- (気づき・課題)・YouTubeを視聴することができない人が一定数存在する
- ・世界に発信できる手段としては、とても意味がある

- ・過去の活動としての資料としても有効
- ・動画の撮影・編集などの個人的負担が大きい
- ・どのように周知していくか課題

・「NAYORO でプチカナダ留学」

市内高校生に「生きた英語」に触れる機会を提供したい思いから、コロナ前に実施していた高校生の交換留学の代案として実施。外国人講師との英語で俳句、カナダかるたなどのゲームやアクティビティを通して、英語でコミュニケーションをとることにより、世界への興味・関心を広げる機会となった。

(気づき・課題)・実際の留学は毎回2名のみだが、複数名の学生が参加できた。

- ・市内の外国人たちの協力を得られ、良い関係性を築けた。
- ・参加費用が大幅に軽減することができる。
- ・2か月間の留学期間を短縮することができた。

しかし2か月間生きた英語を体験する機会がなかったことは残念だった。

【その他】

オンラインでの役員会や、カナダトロント在住の旧 ALT とのオンラインでの再会等、オンラインを活用してできることがあるということを改めて認識。また、事業の中止・延期・縮小化、委員会メンバーに医療関係者が多いことによる活動制限で総会が実施できない等の状況があった。

(課題と今後について)

- ・オンライン相互交流における相手方のインターネットや会議環境の影響。
- ・現在手紙やメールで行っている互いの地域についての情報共有を再考する。
- ・ZOOM 等を用いた交流、SNS の活用等

※「カナダ塾」動画リンク

<https://www.youtube.com/watch?v=8Lfpd1QROts>

<https://www.youtube.com/watch?v=ABYgaS2WtfE>

<https://www.youtube.com/watch?v=MF-IkYjQWkE>

<https://www.youtube.com/watch?v=oArFUybgvSg>

<https://www.youtube.com/watch?v=-AKO9emK5Rs&t=14s>